

漢方友の会々報

漢方友の会



1959年6月号

第1巻第1号

漢方友の会

発足!

かねてから、漢方医学を盛んにするには、与論の推進が必要であるとの観点から、従来専門家だけの団体とは別に、広く各階級の漢方の理解者、愛好者の協力を得なければならぬとの要請があつたが、このほど漸く機熟し、漢方の啓蒙運動から、研究所の設立にまで発展せしめる目的で、漢方友の会が結成せられ、去る四月二十一日、午後五時半より、日比谷、帝國ホテルで、多数名士の出席を得て、発会披露の宴が開かれた。

先づ元厚生次官、現社会事業大学々長木村忠二郎氏が、会長就任

についての挨拶があり、医療法人社団金庫理事長長津村重舎氏が、理事長就任の挨拶があつてのち、友の会の生れるまでの経過ならびに、今後の抱負について語られた。次いで、左の方々から、多様な興味のある感想がのべられ、いままでの漢方の集会ではみられなかつた新鮮なふんい気がみなぎつた。

元厚生大臣 黒川武雄氏 東京
大学名誉教授 朝比奈泰彦氏
東京大学名誉教授 小林芳人氏
慶応大学医学部教授 阿部勝馬氏
国立衛生試験所々長 刘米



朝比奈名譽顧問の御祝辞

- 金則
- 一、本会は、漢方友の会と称する。
 - 二、本会は、漢方医学を愛好する人々を以つて会員とする。
 - 三、本会は、事務所を東京都中央区日本橋通三丁目八番地 中將湯ビル内に置く。

- 評議員
- 黒川武雄 ○奥原広三 ○小林芳人 小柳賢一 ○清水藤太郎 鈴木万平 杉原徳行 前田久吉 高橋敏雄 滝野好晴 永井大三 丹羽番四郎 馬嶋元治 ○三堀三郎 ○宮木高明 安井誠一郎

達夫氏 東邦大学薬学部教授
清水藤太郎氏 大沢実験医学研究所々長 大沢勝氏 東洋大学教授 村松正俊氏 青山学院教授 青山健一氏 アジア学生文化協会理事 鶴橋五一氏 古今評論社々長 吉田東洲氏 日本東洋医学会理事長 矢数道明氏

四、本会は、漢方医学普及のため、左の事業を行う。

講習会、講演会及び座談会の開催、会報、パンフレット等の発行、その他必要な事項。

五、会費は、年額二百円とし、前納する。

- 参与
- 相見三郎 ○石原明 ○伊藤清夫 奥田謙蔵 ○小倉重成 岸本亮一 ○小田芳生 坂口弘 高橋真太郎 ○高橋國海 ○館野健 ○電野一雄 ○田中家治 ○長浜善夫 ○長坂容伸 ○長沢元夫 西山英雄 ○藤平健 ○藤井尚治 経野史郎 森田幸門 ○矢数道明 ○山田光胤 和田正系 渡辺武 (アイウエオ順)

尚ほ高橋真太郎、岸本亮一、西山英雄諸氏より祝電を戴いた茲に深甚の謝意を表します。

最後に、友の会副会長 与謝野光氏が閉会の辞をのべ、あいまいのうちに散会した。

なお、この日の祝辞、感想などは、尊い記念となるので、記録に残したから、折をみて公表されるものと思う。

漢方友の会は、漢方の愛好者が主体となつて、その道の専門家に御協力を願つて、漢方医学の正しい普及発展を目的として結成せられたもので、会則、役員は、次の通りである。○印は、発会式に出席された方々である。

- 役員
- 会長 木村忠二郎 ○副会長 与謝野光 ○理事長 津村重舎 ○常務理事 山口昇 ○理事 大塚敬節 ○理事 津村重幸 理事 春藤和

- 顧問
- 阿部勝馬 相川勝六 ○大沢勝 ○大村重光 ○刘米 渡夫 久下勝次



挨拶 木村会長

薬と迷信

薬というものは、病気を予防し、或は病気を癒して、健康を増進する目的で使用せられるものであるから人がこの地上に生れた時から、薬というものはあつたにちがいない。そして極めて未開野蛮な時代の薬は、おそらくは、他の動物のように、すばらしく敏感であつたと思われる原始人の本能によつて、発見せられたものであろう。この時代の薬は、原始的ではあるが、迷信的の要素は少なかつたであらう。人智がやや進歩して、病気の原因について、それがどうして起るかというようなことを考へるようになってから、そこに始めて、薬が迷信や呪術と結びつくやうになつたと思われる。迷信というものは、人智がある程度発達してから起つたもので、想像や憶測のないところには、まだ迷信の起る余地がない。迷信は人智の発達にもなつて生れたといふと、逆説のように聞えるけれども、現代のように、科学の発達した時代に、迷信がなお行われていることを思えば、思い半ばにすぎないものがあろう。

ミイラ

徳川時代に、すばらしい勢で流

行した薬に、ミイラがある。このミイラは漢方薬ではなく、蘭方が隆盛になるにつれて、流行したものである。李時珍の本草綱目をみると「むかしアラビヤの國に、八十歳ほどの老人があつたが、世捨人になつて、衆生を濟度せんと決心して、一切の飲食を絶つて、身を洗い清め、蜂蜜だけを食つていたところ、一ヶ月ほどたつと、大小便とも、みな蜜になり、やがて死んだ。そこで、これを右の棺におさめ、中に蜜を入れて死骸を浸し、棺に年月をきざんで埋葬した。それから、百年たつて、その棺を開いてみると、屍は蜜剤になつていて、怪我をした人が、これを少しのむと、たちまち治つた。このやうなことは、アラビヤにも、めつたにないもので、これを蜜人ともよんでゐる。」

こんな風に、陶九成はいつてゐるが、果してこのやうなことがあるだろうかとか、疑わしいと、李時珍はいつてゐる。

ところが、徳川時代になつて、このミイラが、万病に効くといふ風評がたつて、ミイラを買い漁る人が多く、人気をおつた。このミイラで、一代の富を作る人も出てきた。

ところが、ミイラがそんなに沢山あろう筈はなく、にせものもミイラが横行した。赤坂には、このミイラの製造物を造るところがあり、これがまたよくうれたといふ。「異説まちまち」といふ本には「木乃伊(ミイラ)は人にあらず」とかく松やに也。それに何か生薬を加えて練布をきせてしめるならん。松やにの証には、薬毒、痰を治するなり。まえかた、大江山にて、蠱賊どもが似せてこしらふ。御法度に成し也。」とある。

松やにには、痰を去る効があるもので、にせのミイラも、痰にはきいたといふのである。

ミイラが尊重せられたのは、それが珍らしかつたからであらう。薬も、時代、時代によつて、流行がある。この流行に堪えて、残つたものでなくては、とてもおそろしく用ゐる気にならぬのは、薬の裏をあまりに知りすぎているせいであらうか。

私たちが、今日用ゐている漢方薬は、千年、二千年の長い間の試験に耐えて、残つてきたものである。効くのが当然であり、効かなくて、どうしよう。ところで、何故効くかが、さっぱりわからないものが多い。

ここに問題が残されている。これからの漢方の研究は、この点に、メスを入れる必要があらう。

(大塚)

金匱会 新らしい漢方

叢書

この叢書は、医聖法人金匱会の定例座談会の速記をまとめたものである。出席者は、大塚、吉村、小出、相見、伊藤、藤平、山田、高橋の諸先生方です。

第一集は漢方を研究するようになつた動機、漢方医学と近代医学との比較、漢方の特質などについて語り合つたものです。

第二集は、健康と漢方という問題をとりあげ、食養について語り合つた。

第三集は、漢方の診察法と治療についての座談会の記事です。

第四集は、高血圧症についての治療法と予防についての記録です。

第五集は、目下印刷中、以下つづいて刊行します。

御希望の方は、第三集は一部百円、他は一部五十円で、お願ひいたしますから、漢方友の会宛御申込み下さい。

漢方夏季大学

開講 予告

とき 昭和三十四年八月七日より同月十四日まで、八日間。毎夜六時より九時まで。

ところ 東京都千代田区三年町一番地。社会事業会館。

講義 漢薬の薬効・成分・薬品の薬方の解説○病名別治療法等。

会費 二千五百円也(教材を含む)。

宿泊 社会事業会館の寮で、一

とき 泊三百円で宿泊できるから、地方の方は御利用下さい。

申込 詳細は東京都中央区日本橋通り三の八 中野湯ビル 漢方友の会(電話四一五五五)に申込み下さい。

右の通り、第一回の講習会よりも、更に充実した漢方夏季大学が開かれますから、奮つて御参加下さい。

春日局を

叱りつけた岡本玄治

岡本玄治は寛永の頃（江戸時代初期）時の天子明正天皇の脈を拝診した程の名医であつたが、学識、胆力兼ね備えた人物であつた。

寛永六年、時の将軍徳川家光が病篤く、侍医はもとより、重臣、側近悉く侍従していた。一説に病は癒癒であつたという。病気が進んで納棺期に至つたとき侍医は酒浴の治法を行なおうと計つた。（酒浴とは酒を加えた湯湯に浴する、一種の温浴療法であつた）この時将軍の乳母春日局が進み出て、侍医達に向つて云うには「皆様は将軍様に酒浴の法をなさろうとしておいでなのですが、一休全体酒浴の法などということが既に庶士で行われているのですか、私共は一度も聞いたことがありません。庶士にない方法を、恐れ多くも將軍様に施して、万一のことでもあれば如何がなさるお預りか」と鋭くつめよつた。その勢いに押されて並居る医者は皆一言もなく下を向いてしまつた。只一人の医者を除いて、この一人は誰であらう岡本玄治その人であつた。そし

て誰一人として春日に応える者のないのを見てとると、泰然として静かに語り始めた。「漢土にないものでも、我が国に存するものはいくらでもあります。唯に酒浴の法のみではありません。酒浴は現今では余り行われませんが、古は屢々行われた良法であります。彼地にはないからと云つて、事突の良法を捨て去るといふこともありません。ましてや、実は此の方法は唐土の医書にも明かに記載があります。これを知らないのは、あなた様が御存知ないだけのことです。」と云つて懐中より一書を出して示した。当時大奥随一の実力者春日も玄治の道理になつた言に返す言葉もなかつた。玄治は更に言葉を続けた。「此の様な医学的知見は、医者が長年刻苦の末にようやく得ることの出来るものなのです。かかる治療は又死回生の高度の技術でもあります。仮りにも素人が口出しをするなどということは、箴に戒めなければなりませんぞ」と声を轟して叱咤する如く言つてのけた。春日は唯唯かしそりに引き下つたといふことであ

ある。この話の真統は不明であるが、この中に含まれる意義は決して小さなものではない。政治に左右されることはならない。政治に左右されるべきでない。これは岡本玄治に言わせるまでもなく古今の鉄則であろう。又外国の文獻にないものは何でも排斥しようとする思想は、自分が知らないものは皆誤りであるとすることに繋る。これは又漢方は未開野蛮なものとかたづけられる一部漢字者の偏見にも通じるのではなからうか。（山田光胤）



凸凹

八味丸は、尿の出がわるいときに用いると、尿の出をよくしてくれるし、尿が出すぎて困るときに用いると、尿が出すぎないようにしてくれる。だから腎臓炎にも、膀胱炎にも、前立腺肥大にも、萎縮腎にも糖尿病にも用いることができる。

酸棗仁湯（さんそうにんとう）は、眠れないときに用いると、よく眠れるようにしてくれるし、眠りすぎるときに用いると、眠りすぎないようにしてくれる。

旋覆花代赭石湯（せんぷくかたしやせきとう）は、下剤を用いるのを禁忌とするような便秘に用いて、通じを氣持よくつけてくれるし、下痢しているときに用いると、下痢をとめてくれる。

漢方の薬方は、凸凹を正す効があり、病氣がある人に用いて、始めて効力を發揮する。だから、健康な動物を用いて、実験してみても、無意味である。だから、八味丸を利尿剤とよぶわけにも参らなしいし、酸棗仁湯を鎮眠剤とよぶこともできない。

先日、胃液瘍のため、胃を三分の二切除したという患者に、旋覆花代赭石湯を与えたところ、それまで、ひどい便秘で、硫酸マグネシウムを多量にのんでも、仲々に快通しなかつた大便が、氣持よく通ずるようになり、大便調子がよくなつたと、よろこばれた。そこで、先日の薬には、下剤は少しも入つていませんよ。もし下剤をしているときに、あれをのむと、下痢がとまりますよという、ますますその患者さんはおどろいていた。

漢方薬の面白さが、こんなところにもある。

日本薬局方を見ると、黄連は苦味健胃剤になつてゐる。東洋医学では、黄連に、鎮静、止血、消炎の効があると考へており、同じ黄連を用いるにも、その用法に可成の差がある。黄連に黄芩と大黃を加えた三黃瀉心湯が、不眠に効いたり、吐血、咯血、經血をとめたり、高血圧症に用いられたりするのを、黄連を健胃剤と考へたのである。説明がつかない。和田東郭という名医は、少い材料を用いて、広く病氣を治すのが名医だといつてゐる。この黄連解毒丸は、黄連、黄芩、梔子、黄柏を丸薬にしたものだが、これには酒消しの効がある。酒のわる酔いを予防するので、酒癖のわるい人には、是非おすすぬしたい。さる漢方の先生の著書においてあつた黄連解毒丸が時々、ごそつとなくなる。不思議だと思つていたところ、酒好きの息子たちが、友人たちに試用してみたところ、仲々よい薬だということになり、さては、時々失敗していたことがわかつた。湯本家真物も、仲々酒好きであつたが、いつも、この黄連解毒丸に大黃を加えたものを作つて、のんでおられた。便秘がひどかつたので、大黃を入れて通じをつけておられた。

東と西

くすし（医師）てう名さえ恥し今はただ人に病のなき世ともがな
（吉益賢詞）

八十翁春山を楽しむ

ゴールデンウィークを利用して
立山に行つた。五月三日、早朝、
富山駅におりたち、私鉄ケーブ
ル、バスと乗り換えて行くうちに、
に、新緑の初夏の風景は、数時間
のあいだに、今なお雪深い春の立
山の景色えと、急変していき、こ
ちらの気持ちも、いつの間にか、冬
の環境の中にあるような気分えと
変つていくのが、我ながら妙な気
持であつた。翌早朝、雷鳥沢を噴
登して、烈風の中を別山に至り剣
岳の偉容をカメラに収めて、思う
存分スキーを滑りつつ山小屋に
下りつた。雷鳥沢の温泉で、汗
を流している、小柄だが、から
だつきのがつしりした老人が、つ
れの若者と二人で入つて来た。聞
くところによると、今日のはあゝ急
な雷鳥沢を登つて、別山乗越に至
り、更に向う側えと剣沢を下つて
剣沢小屋で昼食をとり、下りはス

キーで滑つて来たのだという。
年を聞いて驚いた。本年とつて、
満八十だといふのであつた。それ
でいて、微塵も疲勞の様子がない。
い。話してみると、毎年相当な山
の縦走などを二つ位はやるのだそ
うである。

あまり驚いたので、後学のため
に、一体どんなものをたべている
のかをきいてみた。酒、たばこは
やらす、魚はたべるがけもの肉
はたべない。ほかのものは、何で
も食べて、嫌いなものがないとい
う答である。とすると、山は好
きだが、酒も好きだといふ私など
は、とてもそれほどに、いつまで
もは、山に登れるわけにはまいら
ぬらしい。

何はともあれ、八十翁が春山を
登り、スキーを楽しむ園は、考え
ただけでも、うれしくも、うらや
ましい風景ではある。(藤平健)

漢方をどう考える

漢方友の会では、漢方医学に関
する世間一般の希望や感想を広く
募つて、本誌に連載して行く予定
で、そのアンケートを求めること

になりました。何卒、皆さまの
御協力によつて、御回答が多数よ
せられるよう、御願ひいたしま
す。

耳袋

○黒川元厚生大臣の漢方通には、
友人もはだしてある。八味丸を六
年前からのんでいるが、これを吞
みはじめたから、冬になつても、
肌が荒れなくなつた。月曜と木曜
には、散逆湯をのんでゐる。これ
は、放射能の害を予防する目的だ
そうである。酒をのみすぎたあと
では、酒の毒を消す目的で、三黄
瀉心湯をのんでおく。肝臓が弱つ
た時は、茵陳蒿湯や大柴胡湯をの
むというような調子。○朝比奈察
彦先生は、正しい漢方の発達に
は、医師、漢学者、漢業者の三者
が、夫々の任務をつくすことによ
つて、可能であることを力説せら
れ、漢業者は、日本産の材料を専
重し、正しい材料を臨床家に提供
せよと叫ばれた。「毒を売る者は、
阿限、薬を用いるものは一限、薬
をのむ者は無限」という諺が、古
くからあるほど漢方薬の選品はむ
づかしい。いくらコッタが腕たち
でも、材料がわるくては、うまい
料理はつくれない。○小林芳人先
生は、この会が正しい漢方を研究
する会だと考えたので、顧問を引
受けたと前置きして、漢方が病氣
を治すのではなく、病人を治すこ
とを建前にして、体質を違へず
医学である、漢方の特質につい
てのべられ、これからの医学は、

体質にまでクワを入れないと、必
ず行詰ると思う。漢方では、虚実
という分類をしているが、大変興
味がある。もう百年もたてば、こ
の体質の問題が、もつと明になる
であらうと言われ、更に、漢方に
は、格言も実験もなく、ただ信じ
ろというだけで、信するも、信じ
ないのも勝手だといふところがあ
ると、漢方の短所をちよつぱり。
○阿部勝馬先生は、中国の漢方医
界を視察された時の回顧談から、
朝鮮人参や陰華聖の強精作用を薬
理学的に証明できた話などをして
のち、漢方はもつと近代医学の立
場でも再検討しなければならぬと
結ばれた。

友の会だより

○漢方友の会の会報、第一号の編
集を終つた。片々たる小誌ではあ
るが、会員にしたいしにしたい
内容の充実したものにした。

○「活」という題名は、津村理事長
の発案で、木村会長の手になつた
ものである。○本会主催の第一
回、漢方講習会は、定員百名をは
るかに突破し、会場に収容されな
くなり、やむを得ず、次回まで待
つていただくかねばならぬ方もあ
つた程で、仲々盛況。そこで八月
には、別項に発表したように、夏
季大学を開催することになった。

漢方友の会 報活 第一巻第一号
昭和三十四年五月二十五日印刷
昭和三十三年九月五日発行
東京都中央区日本橋區
三の八・中得湯ビル
東武和合会(20)一五五番
電話東京
発行所 漢方友の会
編集 山口 昇
発行人

地方から上京する方は、あらかじ
め予約しておけば、社会事業会館
の寮で泊ることが出来る。一泊三
百円という安価である。○日本東
洋医学会の事務所が、この四月か
ら、中得湯ビルに引越してきた。そ
れに漢方友の会の本部も、ここに
ある。医療法人金沢会の中得湯ビ
ル診療所もここにがある。ここえく
れば、だれかに会える。漢方のクラ
ブのように、なりつつある。○本
会に入会希望の方は、御一筆下
さい。入会申込書を御送りします。
会員の方々は、御動静をお知らせ
下さい。○台湾医学会会長杜聰明
博士が、いよいよ高雄医学院に、
漢方の講座を設置するよし。その
ため日本の漢方を学ぶ留学生をよ
こされるようである。